
破壊への道程を

保泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊への道程を

【Nコード】

N5511BA

【作者名】

保泉

【あらすじ】

願うことは、ひとつだけ。

童顔な青年の、リンバウムでの道中記。

以前HPがあったところに乗せていたものです。途中までできてはいますが、手直し・別作品の気晴らしふくむため、更新は亀以下です。ご了承ください。

第一話 始まりはいつも唐突に

西の空に太陽が沈み、東の空につきが昇り辺りがすっかり暗くなつてからすでに数時間、彼は住宅街をゆっくりとした速度で歩いていた。

もう深夜としかいえない時間帯だが、試験勉強中にシャーペンの芯がすべてなくなり、あとは油性ペンぐらいしか手元にならない状態だったため、彼は仕方なく寒空の下に身をさらすはめになった。

コンビニに向かうべく、気分転換も兼ねて街灯があるにも関わらず暗い夜道をゆっくりと歩く。実はこの先にあるコンビニには一件しかないのだが、其処にいたる道が彼はとても嫌いだった。

なぜならば。

「ねえ、君……中学生だよな？なんでこんな時間まで外にいるのかな？」

「俺は大学生です」

いつも近くにある交番の警官に小・中学生と間違えられるからであつた。

彼こと野中篤志十九歳、もうすぐ晴れて成人の仲間入りの予定。最大のコンプレックスは百四十九センチの身長と、小学生並みの童顔だった。

あの後、いくら説明しても信じない警察官に、学生証と免許証ま

で提示してようやく納得された。ここまでしないと信じてくれない警官に呆れつつ、そんな事態を引き起こす自分の容姿に彼は打ちのめされ、いつものことだと心の中で慰める。

慌てて謝罪した警官にお詫びの品だと飴を貰い　このあたりまだ彼を子ども扱いしていると思える　それを口に含みながらコンビニに向かう道を再度歩き出した。

少し歩いたところで、ブロック塀の横にゴミ袋が積み上げられているのが見える。そういえば今日は燃えるごみの日だったか、と自室のゴミ箱の中身を思い出してみる。特に急いで捨てるものはないなど前を見直したとき、異質な物体が紛れているのが目に付いた。細長く金属で出来たそれは、小さな傷が表面いっぱいに刻まれており、所々黒っぽいものが付着している。

手に取ってみて、彼の顔に思わず苦笑いが浮かぶ。

「なんで、普通に鉄パイプが捨てられてるんだらうな。しかも使用済み」

この場合の使用済みは正規の部品としての使用方法ではなく、喧嘩や抗争などの物騒な使用方法での使用済みだった。こびれ付いている黒いものは恐らく血液だろう、どこかの血の気が多い誰かの。

鉄パイプを見て感じるのが懐かしさというあたり、濃い青春時代を過ごしたなあ、と彼は遠い目で夜空を見上げる。実は彼が一番使用していた獲物だった。若かったんだよ、お兄さんも。

「ここにあつたらガキ共が振り回して遊ぶな……ちよっくら捨て場所変えるか」

いまいる道は小学校の通学路に設定されているから、面白がって

学校まで持つていく姿が目には浮かぶ。好奇心旺盛なのはいいが、鉄パイプの違う使用方法が出来れば知らずにいてほしい。先輩として後輩が同じ轍を踏まぬようにと、親切心を出した彼は鉄パイプを持つて近くの工場まで歩くことにした。

進路を変えて数分後、なぜか鉄パイプが熱く感じて視線をそれに落とした。

「んだ……？ 光ってないかコレ」

視線の先の、彼の右手には発行する鉄パイプが握られていた。間違っても蛍光塗料が塗られているわけでもなく、鉄パイプ自体が光を放っているように見える。

背筋を冷たいものを通り、慌てて彼は手を離そうとしたが指がまったく動かない。固定されているように硬く鉄パイプを握り締めている。自分の手なのに、自らの意思で動かすことが出来ない状況に、彼はただ呆然と立ち尽くすだけ。

突然、鉄パイプから放たれる光が強くなり、光の眩しさに思わず彼も目を瞑る。瞼の裏からも強い光を感じて、目が焼かれるかもしれないと彼は本気で考えた。

体中を何かを通り抜ける感覚に、自身の中身をかき回されるような思いがして不快感に眉を潜める。

それでも目を開けようとは思わなかった。開けてはいけない気がしていたから。

第二話 出逢ったのは優しいひと

光が収まるのを感じて一番に感じたことは、何かが燃える臭いと酷く懐かしい鉄の臭いだった。

なぜ、自分はこんな所にいるのだろうかとうと彼の思考は疑問で埋め尽くされる。さつきまで確かに住宅街にいたはずなのに、いつの間にか辺りは赤く火の手が上がる夜の森に変わっていた。生ものが焼かれる臭いに口の周りをとっさに押さえ、こみ上げてくる吐き気を耐える。吐いたほうが楽だと彼もわかっていたが、なぜか耐えていたほうが良いと直感した。

「失敗……した？」

すぐ近くでか細い声が聞こえた。振り返ると、やけに裾の長い黒いコートを着た人物がうずくまっていた。その人の足元には黒い水溜りが出来ていて 血だ、と思わず彼は呟いていた。息も絶え絶えに彼を見つめるその人は、驚愕に丸められた目を細めて口元を歪めた。

緩やかな、済まなそうな笑みだった。

「すみません 召喚に失敗してしまつたみたいです。貴方はシルタインの人間でしょうか？」

「へ、召喚？ シルタインって地名かなにかのことか？」

流石に彼も、この場所が日本じゃないということは理解していた。日本でこんな山火事があったら、速攻で消火活動が始まるはず。飛行機事故とかでここが山奥ということならそれも分からないでもない

いが、彼は飛行機に乗っていたわけではないし、何故ここにいるのかという理由が説明できない。

先ほど、目の前の人物は『召喚』と言った。そして失敗したとも。

「あー、召喚元つてのは決まっているもんなのか？　しかも誰でも知ってるくらいに」

「え？　ええ、この世界リンバウムを中心に四つの世界がありますので。……そういう風に聞かれるということは、貴方は召喚術を知らないということですか？」

「小説の中じゃ王道な魔法なんだけどなあ。実際に体験したのも見たのも初めてだわ」

ゲームじゃ王道過ぎてポピュラーな魔法だけど、と彼が呟くのを、その人はじっと見つめていた。

「召喚術を知らないのならば、今の状況が疑問だらけでしょうね。召喚術とは異世界の存在とサモナイト石……これのことですが、この石を介して契約をする術です」

その人は手に持っていた石を彼に見せた。未だ淡い光を放つ透明な石は、なにやら文字が刻まれていた。

「なんて書いてあるんだこれ……って、『鉄パイプ』？」

石には何故か日本語で『鉄パイプ』と記されていた。恐らく、この石で鉄パイプと契約したということだろう。無機物でも契約できるんだな、と彼はまじまじと石に刻まれた文字を見つめていた。

「石には契約対象の真名が刻まれます。術師は真名を知ること召

喚対象を制約で縛るのです」

「縛るねえ。その言い方だと両者の力関係は対等じゃないってことか」

「その通りです。制約によって召喚対象は術師に逆らえず、又元の世界に帰せるのが召喚した術師のみの為、言うことを聞かないといけない状態ですね」

「人使いが荒いにもほどがあるなオイ」

「耳が痛いですねえ」

彼が正直に感想を言うと、苦味は混じっていたが、その人は笑った。力の入らないその笑みに、彼はその人が怪我をしているらしいことを思い出す。怪我人を前にしているのに、すぐに手当てをしなかった自身に舌打ちをする。事態に動転していたとはいえ、暢気な話をしている場合ではなかった。

「ゴメン……その怪我じゃ話すのも辛かっただろ」

着ていたTシャツを引き裂いてからしゃがみこみ、手当てをするためにその人の腕を取る。しかし、血で赤く染まった手からは体温を感じ取ることが出来ず、酷く冷たかった。

血行が良くない、というレベルではなくて、すでに血が通っていない人形のように硬く強張っている。

もう壊死しはじめているのか、と彼はじつと冷たい腕を睨みつけるように見る。

「その気持ちだけ、ありがたくいただいておきますよ。ですが、私は助かりません」

「そんなこと！まだアンタは生きてるじゃないか」

「それも時間の問題です。これでも軍に従事してきましたから、自

分の限界は分かっています。魔力も尽きてしまった上に、あの化物に意識を奪われそうになっているのですから」

彼はその人の身体が何かに耐えるように震えていることに気が付いた。小刻みに動く身体を見て、思わず強く手を握りこむ。その人の顔を見上げるように彼が覗き込むと、その人はふんわりと微笑んだ。

「取り憑かれた、といいますか。この森にいた悪魔に憑依されてしまったんです。今はまだ私の意識が表にいますが、何時取って代わられるか……わかりません」

その人は、彼の頬に手を当てて、静かな声で言った。

「貴方には本当に申し訳ないことをしました。事故とはいえ、巻き込んでしまった上に貴方を守ることさえ出来ないのですから。」

もうすぐ私の意識は完全に消えてしまうでしょう。そうなる前にここから逃げてください、私の身体を手に入れた悪魔が貴方を襲う前に」

真剣な顔で言うその人に、彼は目を見張ることしか出来なかった。ゆっくりと彼を突き放すその人は、懐から細長いものを取り出して彼の手に押し付ける。

「この世界には野盗や召喚師とはぐれた召喚獣がたくさんいます。その短剣は身を守るのに必要でしょうから差し上げます」

「アンタを、置いてけつてのか」

「言ったでしょう、私は助からないと！」

先ほどよりも幾分強めの口調でその人は彼に言った。

「今はこの森も静かなものですが、本来ここは悪魔が多く住んでいるのです。私に憑いた悪魔を恐れて姿を見せませんが、私の意識が消えた途端、貴方に襲いかかるでしょう」

「……アンタに憑いてる奴は、そんなに強い悪魔なのか？」

「ええ……私が見たどの悪魔よりも、はるかに。感じる魔力が違います」

青ざめる彼の顔に、彼は取り憑いた悪魔の恐ろしさを間接的に感じ取った。

彼は思案する。そんな悪魔がいるのでは、自分には到底この森を抜けられるはずがないと。その人から離れた彼は悪魔達の格好の標的となるというのに、その人は自分から離そうとする。おそらく、ここに残ったほうがより悲惨に彼は殺されるのかもしれない。

しかし、どちらにせよ助かる可能性は低い。悪魔に襲われることは確実に、その人に憑いた悪魔が彼を逃がすという可能性も低い。その人に憑いた理由がどういふものかわからないが、その人の立場を欲してというのなら、彼という目撃者は邪魔だ。

彼は思案する。それならばここに残ってもかまわないだろうと。

彼はうずくまるその人の身体を抱きしめた。残念なことに彼は背が低いものだから、背の高いその人の背中に腕が回りきらなかったが、低い体温に擦り寄った。ビクリとその人の身体が揺れるのを感じて、彼は笑いを声に含ませて言った。

「うまく逃げ切る自身ねーし、このままアンタと一緒にいるよ」

「な、何を言っ……」

「最後までらい、わがまま言ってもいーんじゃねー？　こんな森で一人で消えていくのは寂しいだろ？」

その人は言葉を返さなかった。しかし、息を呑む音と彼の背に回された腕が何よりもその人の心情を語っていた。

継るように腕に力をこめるその人の背を、彼は何度も何度も撫でていた。

「すみません」

「気にすんな」

「巻き込んでしまった」

「ある意味俺の自業自得だ。鉄パイプ拾わなきゃよかったんだからな」

「ごめんなさい」

「だからいーって。俺も一人で死ぬの寂しいもんな」

「ありがとうございます」

「おう」

何度もその人は謝り、彼も何度も宥めた。そのやり取りに苦笑を浮かべつつも、彼はその人の頭や背中を軽く叩く。

「そーいやさ、自己紹介もしてない俺ら」

「そうですね」

「んじゃ俺からな。野中篤志、篤志っていうんだ。アンタは？」

「私は……レイムといます」

穏やかに笑うその人の笑顔を彼が見たのは、それが最後だった。後はただ、ひんやりとしたその人の身体を抱きしめていた。

第三話 魔王に囚われた

篤志とレイムはしばらくの間抱き合っていたが、突然レイムが篤志の身体を地面へと押し倒した。

人間とは考えられない力で腕を顔の両側に押し付けられ、何処までも嘲りの色を浮かべた瞳にもう『レイム』と名乗ったその人がいないのだと、篤志は知った。

「馬鹿な人間ですねえ……『レイム』を見捨てて逃げれば助かったかもしれないというのに」

男の癖に柔らかく温かかった声は、冷たい声音で侮蔑をこめて篤志に向けられている。あの声が好きだったのにと篤志は内心残念に思う。

「うわー、全然雰囲気が違うな、やっぱ。保父さんから行き成り大魔王に転職かい」

「おや、人間にしてはよく気がつきましたね」

「……え、ホントに魔王なのアンタ？」

ニツコリと笑顔……といっても物凄く馬鹿にされている笑顔ではあるが、それを向けられて篤志はつい息を吐く。嘘から出た真、ひょうたんから駒とは言うものだ。本当にゲームの世界のようだった。

「するとこの森は魔王の城を守る魔の森ってところか？……うん、陰湿で暗いイメージがジャストミート」

「残念ながら、この森はアルテミス森の森といって豊穡の天使アルミ

ネが結界を張った場所ですよ」

「ええー、なに天使とか明るいイメージの名前つけちゃってんの。逆じゃん、逆。其処はむしろ……えーと、アンタ名前なに？」

「『レイム』ですか？」

「それはその身体の持ち主の名前だろ。アンタの名前だよ魔王様」
「ですから私が『レイム』なんですよ。この身体はもう私のものですから。それに真名を知られるということは、己の存在を縛られるということ。貴方如きに私が教えるはずないでしょう？」

「アンタ素敵に俺様だな。そっぴや俺の国でも本当の名前を知られると操られるってあつたな……ところでアンタ、俺の名前知ってちやったりする？」

「もちろん知ってますが？」

「うーあー、俺ピーンチ」

それ以前にもピンチであるが、こんなノリでもないし篤志は目の前の魔王様と会話など到底できなかった。レイム、確かにコイツすげえわ……篤志は内心でもういない彼に呼びかける。頭のなかで煩いくらい警報がなっている。

彼が召喚師としてどれほどの位にいたか分からないが、この森に入ることで自体が無謀だったのではないだろうか。結界が張ってあつたようであるし、手を出さなければ今も無事に過ごしていたと思われ。

結界が張られた森の中を知ることが出来なかったのかもしれない。悪魔の巣窟になっていると知っていれば、魔王が住んでいると知っていればたとえ軍人でも、封印を解いて入ってはこないだろう。

「随分と余裕ですね、もうすぐ殺されるといふのに。こういうときはニンゲンは祈ると思っていましたか？」

「祈るって、何に？神様？それより目の前の魔王様に命乞いしたほ

うが早いと思わねー？」

「……確かにそうですね。それでは貴方は私に命乞いをしますか？
助けてくれと泣き叫びますか？」

「いんや、無駄だしやんない」

即答した篤志に、さすがの魔王様も面食らったようだった。きよ
とんとした表情に『レイム』を見つけて、篤志は嬉しいような寂し
いような、複雑な気持ちを感じた。

「アンタ絶対サドだからな。ああ、サドってのはサディストの略で
簡単に言えば痛めつけるのが好きな奴っていう意味。んで、俺がア
ンタに命乞いしたとしても、苦しませてから安心したところで突き
落としそうだし。俺の悪魔って存在に対する勝手なイメージだけど
さ、間違ってる？」

「いいえ、とても正しい認識ですよ」

「……そこはできれば否定して欲しかったな、ちょっと」

目の前の魔王様の顔はとても楽しそうに篤志を眺めている。彼に
取って篤志の言葉などやせ我慢に聞こえるのだろう。しかし、篤志
は助からないと悟っていた。彼には篤志を生かす理由がない。彼が
どんな目的で『レイム』の身体を乗っ取ったのかはまだ分からない
だがレイムたちの軍がわざわざこんな森に来た、ということで大體
想像はついていた。

「冥土の土産ってことでちょっと聞きたいことあるんだけどさ、い
い？」

「内容次第ですね」

「けちくせえな、それくらい譲歩してくれよ……まあいつか。えー
つとな、この森には何か物騒なもんあるだろ」

途端、ピシリと周りの空気が固まったように篤志には感じられた。腕を掴む力を強められて、篤志が痛み顔に顔を顰めて見上げると、冷たく笑った顔と目が合った。

「何故、それを知っているのです？」

「知ってるわけじゃない。予測しただけだ」

息が掛かるくらい顔を近づけられて、ひゅう、と彼は思わず息を吸う。魔王様は何か冷気でも発することができるのか、物凄い冷たいものに包まれてる気が彼にはしていた。

「軍が動くには大抵理由がある。母国の危険の回避のために動くつてのがザラだが、何もないとところにわざわざ結界を破る苦勞してまで入るはずがない。しかも、その森には悪魔が大勢いるんだからな人間に取っっちゃ死に行くようなもんだ。まあ、今回はそのことを知らなかったみたいだけど？」

次に、天使が張った結界の中にアンタがいること。魔王と自分から言うほど力を持つてるアンタが、なんでこの森にいるのか。多分アルミネっていう天使と戦って負けたか引き分けたか知らないけどさ、相当な力をアンタは失ったはずだ。だからこそ、アンタはこの結界の外に出られたはずだ。なのに、アンタは外に出なかった。この森よりは外のほうが絶対に食料……悪魔って何を食うんだ？……それは置いといて、少なくとも楽しいはずなのに。出なかったのはここに目的のものがあつたから。

魔王様、アンタが欲しいモノがここにあるんだろ？」

「これはこれは……驚きましたね」

少々長い台詞を言い切り、篤志が満足感に浸っていると悪魔は彼の頬に指を滑らした。

「仮定だけで私の状況と目的まで当ててしまうとは、ニンゲンにしては興味深い存在ですね、貴方は」

「多分褒められているみたいだから、どうもありがとう」

篤志は褒められているのに嬉しい気がしなかった。仮定を肯定されてしまったからだ。悪魔の中での篤志の印象は、最初は彼が悪魔だと知っているという点のみだった。ところが今は彼の目的まで知ってしまったている。

コレは確実に口封じのためにくびちよんぱ、かなと息を吐いた。

「今殺すのには惜しい気がしてきましたね……ふふふ、これが貴方の策ですか？」

ところが魔王様はこんなことを言い出した。

「そんなつもりで語ってたわけじゃないんだけどな。むしろ安らかなエンドから玩具エンドに進路変えアード急発進？」

「くくく、貴方の『レイム』に対する感情が心地よいのもありましたね。常に負の感情を提供してくれる存在が欲しかったというのもありますね」

「負の感情？」

「私たち悪魔の嗜好品ですね。貴方のは軽いものですけれど、つまむ程度には美味しいもので」

つまり、篤志はおやつのようなだった。空腹時に摘む程度の。

「手放すことなど期待しないでくださいね？それなりに貴方を気に入りましたから」

「……拒否権ないんで好きにして」

とりあえず、今しばらくは生きていることが出来るようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511ba/>

破壊への道程を

2012年1月15日01時56分発行